

経験が浅い養鶏農家に対する飼養衛生管理指導

紀南家畜保健衛生所
○松山真也 藤原美華

【背景・目的】

平成30年に新規就農した養鶏農家において、令和2年7月頃から採卵鶏で尻つつきが原因の死亡事故が継続的に確認された。そこで、飼養管理及び衛生管理の両面から問題点を洗い出し、指導・改善を行うことで死亡事故による損失を最小限にし、生産性を安定化させることを目的とした。

【方法】

- ① 農家から毎月報告される報告徴求を基に、尻つつきによる死亡羽数の推移を分析した。
- ② 飼養管理面及び衛生管理面の両面で問題と考えられた点を洗い出し、改善するよう指導した。
- ③ 指導後の死亡羽数の推移を再度調査し、状況を確認した。

【結果・考察】

- ① 初めて尻つつきが確認された令和2年7月から、家畜保健衛生所に尻つつきが多いと相談のあった令和2年11月末までの死亡羽数の推移は表1のとおりである。
- ② 尻つつきが特に増加した場所が外気の影響を受けやすい両端の部屋であったことから、急激な温度変化によるストレスが原因のひとつであると考えられた。そこで鶏舎側面を板で囲い、冷気の直風を防ぐよう指導した（図1）。また、1部屋（約25㎡）あたりの飼養羽数を150羽から100羽に減らし、ストレスを緩和するよう指導した（図2）。なお当初の飼養羽数でも計算上1㎡あたり6羽だったが、区画中にはネストや止まり木・遊具・餌箱・飲水器等が設置されていたため、実際は過密状態となっていた。さらにデビークが不十分であったため、適切にデビークされた鶏を導入するよう指導した（図3）。

一方、衛生管理面では、糞便検査、サルモネラ検査、大腸菌数検査、アンモニア濃度の測定を実施したが、今回の検査では虫卵及びサルモネラは検出されなかった。また大腸菌およびアンモニア濃度においても、問題となる要因は確認されなかった（表2）。

- ③ 表3は令和2年7月から令和3年5月までに尻つつきにより死亡した羽数の推移を表したものであり、この期間に行った指導について色を変えて示している。橙色が鶏舎側面に壁を設置した群、緑色が飼養密度を変え、デビークされた鶏を導入した

群である。壁を設置した群では、死亡羽数が2か月目から減少傾向となった。緑色で示した最新の導入群（令和3年2月導入）は、1部屋に100羽の3部屋、計300羽で、適切にデビークされた状態で導入されており、現在のところ尻つつきは発生していない。

【まとめ】

今回、新規就農農家で尻つつきが原因の死亡事故が連続発生し、経営的損失が発生した。これは、急激な寒冷感作および飼養環境によるストレス、さらに不十分なデビークが原因であった。改善指導後は尻つつきの発生を抑えることができ、生産性が安定化した。今後も経過を見守ると同時に、状況に応じた適切な指導・助言を継続していく。さらに、最適な飼養密度や鶏種による尻つつきの状況、また当該農家で使用している自家配合の飼料についても調査し、経営状態の向上を目指す。